

Cherlyn Skromme Granrose and Eileen E. Kaplan

*Work-Family Role Choices for Women in Their 20s and 30s:  
From College Plans to Life Experiences*

Westport, Connecticut: Praeger 1996, xiii + 201 pp.

近年、日本においては専門職の女性を中心に、出産・子育て期の就業継続意向が強まっている。また、女性の雇用労働力化の進展は出生率低下の一要因であるといわれている。しかし、子育て期の女性の就業継続率にほとんど変化がないことも事実である。一体、女性のライフコース選択はどのような要因の影響を受けるのだろうか。また、仕事と家庭の両立には何が必要なのだろうか。

本書はアメリカ東部の2つの大学に1980-82年に在籍した約210名の女性を対象にした、出産後3年以内に仕事に復帰するか家庭にとどまるかというライフコース選択の意向に関するパネル調査の結果に基づき、選択に影響を与える要因と仕事と家庭の両立を可能にするための課題について論じたものである。論述は理論的というより記述的だが、定量的調査、パネル調査を行っている点で興味深い。

本書の構成は以下の通りである。第一章「女性の発達の曖昧さの源泉—状況要因—」ではアメリカにおける1970年代以降の女性の労働に関するセンサスデータと研究課題が示される。第二章「高学歴女性」では調査と分析方法の概要が示され、第三章から第六章で4つのライフコースタイプの特徴が記述される。第七章「一貫性・変化・比較」ではライフコースタイプ間、コーホート間での比較が行われる。第八章「未来への提言と展望」では政策的提言がなされる。

女性のライフコース選択は、在学時(1980-82年; 以下時点1)とフォローアップ時(1990年; 以下時点2)での仕事と家庭に関する意向から、Careerists (時点1/2での意向: 仕事/仕事, 全サンプルに占める割合: 34.45%; 以下同様), Homemakers (家庭/家庭, 22.49%), Breadwinners (家庭/仕事, 31.58%), Nesters (仕事/家庭, 7.18%)の4タイプに分類される。

著者らはライフコース選択に影響を与える要因として、学生時代のキャリア準備、状況効果、時代効果を指摘する。例えば意向を変更した群(BreadwinnersとNesters)としない群(CareeristsとHomemakers)では、キャリア準備の詳細さや職場、家庭の状況が異なるという。また、ライフコース規範の拘束力が弱まっていることから、それ以前の世代の女性と違い、本研究が対象とした世代の女性のライフコースに対する満足感、個人が自分の選択に納得できるかどうかによるという。

しかし、自らの選択に対する納得という個人の責任を指摘しながらも、著者らは個人の選択が状況の影響を受けるという視点を強調する。あるライフコース段階での個人の選択(出産後に仕事に復帰するかしないか)は、それ以前のライフコース段階において個人を取り巻いていた状況(例えば職場でやりがいのある仕事を与えられていたか、配偶者がキャリア形成に協力的だったかなど)の影響を受けるというのである。そして企業に対する政策的提言として、初期キャリア段階の女性にやりがいのある仕事を与えるキャリア管理こそが、女性の定着率を高めるという。仕事のおもしろさを感じていなければ、両立支援制度が充実していたとしても、女性は出産後、仕事に復帰しないという著者らの指摘は注目に値する。

最後に本書の分析に対する批判を述べる。本研究のサンプルの約半数は時点1での意向と異なり、出産を延期している。しかし、その原因の検討は行われていない。働く女性が出産に至らない原因を明らかにすることが、出生率低下の要因を理解する上で重要な課題であることを考えると、「Work-Family Role Choices」とタイトルに冠しながら、この点が分析されていないのは残念である。

(仙田幸子)